大阪国際中学校高等学校
WEBサイト・読み物
教職員のおすすめ図書
SEASON 2
Vol.05

人間って悩みながら、生きていくもんなんです。だからこそ、工夫次第で少し楽に生きていけるんです。

英　語　科　　河村 元晴

『道は開ける』

デール・カーネギー　著 ／ 香山 晶　訳　創元社

―― どんな中高生時代を送られていましたか。

中学生の頃はテニス少年でした。そんなに上手くもなかったんですけど、毎日一生懸命に練習していましたね。そんなテニス少年だった私も多感なこの時期、音楽に興味が湧いてきました。特に洋楽にハマりましたね。高校は俗に「進学校」と言われるところに奇跡的に入れたんですけど、高校はテニスをせず、バンドをしながら勉強の予習復習…そんな忙しい毎日を過ごしていました。もともと要領がいいタイプじゃなかったから、どうすればバンドを続けながら、効率よく勉強で成果が出せるか、結構考えました。高校の時に教わった先生のお力もあって、音楽を続けながらも、高校入学時には偏差値 40 そこそこだったのが、大学受験の頃には 60 くらいにまでなったんです。こんな経験をしているので、人生の後輩たちに、こうすればもっと勉強は効率よくできるんだよ、やりたいことと勉強って両立できるんだよって伝えたくて、教師を目指そうと思ったんですよ。

―― 今回先生が取り上げられた『道は開ける』。この本について。先生のエピソードも踏まえて、軽くお話いただけますか？

この本はいわゆる自己啓発本にジャンル分けされると思うんですが、読んでみて、そんな印象は感じません。事例集とでも言いましょうか。短編小説集みたいに、短い物語がいくつも連なって、ひとつの教訓みたいなものを教えてくれます。私は教師になろうと決心する前、結構いろんな進路も考えていたんです。ちょうどその頃、リーマンショックで景気が急激に落ち込んだ時でもありました。就活で、もう何社落ちたのか分からなくなるくらいで、めちゃくちゃ落ち込んでいた時にこの本を読んだんです。そしたら「なんだ、あんまり考えすぎなくていいんだ」って思えるようになりました。なるようになる。面接で落とされても、命がなくなるわけじゃない。もうちょっと楽に生きていこう。そう思え

るようになった時、「自分のこの経験を若い子たちに伝えて、役に立ててもらおう」って考えに変わったんです。そこから私は就活をやめて、教員になるために大学院に進むことに決めました。大学院では研究することより、もっぱら教員資格を取るために必死で勉強していましたね。朝から勉強を始めて気がつけば夜中の4時とか。そんなに心身を酷使して勉強しても、この本では、人の命は簡単に尽きないというようなことも書かれていて。目標を持った時、人間って強いんだなって感じました。

――この本と出会ってなければ、もしかすると教員になっていなかったのかも？

そう思います。私って自分で言うのもなんなんですが、すごく神経質で潔癖症なんです。電車の吊り革すら本心は触りたくないくらい。それもこの本を読んでからは少しマシになったように思えます。この本の原題は『How to Stop Worrying & Start Living』。訳すと、心配とか悩みとか懸念とか不安を止めて、人生をスタートさせようって意味なんですけど、確かにクヨクヨしても、ポジティブに生きても、時間は同じように過ぎていきます。そしたら、ポジティブに生きた方が人生は楽しい。私が教員になろうと思ったのも、ポジティブに生きる人をもっと増やしたいと思ったから。今振り返ってみると、そういう部分が大きかったのかもしれませんね。

――今回、この本が取り上げられると聞きまして、私もあらためて読んでみました。この本には本当にたくさんのエピソードが掲載されていますね。

末期ガンを患った患者が、この人生の最後に夢を叶えたいと、世界一周クルージングの旅に出るんですけど、旅行中に少しずつ症状が良くなっていって、最後はがん細胞が消えてなくなったって話があります。あくまでこれはこの本の中で書かれているストーリーのひとつで、船で世界一周すれば病気が治るのかって言われれば、そんなことないってなるんですけどね。ただ、ここから言えるのは、いよいよ背水の陣って時は開き直ったり、覚悟を決めて行動するってことも大事なんだよって教えてくれます。

あと、このエピソードも好きですね。人生の贈り物にレモンをもらったけど、愚か者は「自分は敗者だ」と諦め顔をする。けど、賢い人はレモンでレモネードを作ろうと試みます。そこにクッキーがあれば、レモネードとクッキーで最高なひとときを過ごすことができます。レモンの贈り物は決して悪いことではないんですね。ものは考えようと言いますか。アンラッキーな出来事をラッキーに変えることが人間にはできます。自分にとって、どんなに辛い状況でも、希望を持ってポジティブに生きれば、きっとそこから新しい何かが生まれる。

――国際生のみんなにこの本をおすすめするポイントは？どんな時に読んで欲しいですか？

自分もそうでしたが、中高生の時代ってしんどさを感じたり、その年代ならではの悩みとか挫折感とか、たくさんあると思うんです。大人はね、いとも簡単に「やりたいことを見つけなさい」とか言うんですけど、やりたいことって簡単に見つからないもんです。ある意味、それを探しに学校に来ていると思ってもいいんじゃないですかね。ただ、私は言いたいんです。君たちが今悩んでいたり、苦しんでいること。中身も違うし、感じ方も違うかも知れないけど、おじさんの年齢になった今も、君たちと同じように悩みながら生きているぞ、と。人間って悩みながら生きていくもんなんだ。だから、精神的にちょっとしんどいかなって思った時、この本を開いてほしいですね。全部読まなくてもいいんです。さっと開いて、読みやすそうなところ

だけ読むだけでもいい。きっと今の悩み事が少し軽くなると思います。読む前より、少し楽に生きることができると思います。

――この本がきっかけのひとつとなって、教師になられました。河村先生ご自身はその人生の未来をどんな感じで描いてらっしゃいますか？

そうですね。年老いて、教師という仕事をリタイヤした時。私がやりたいのは喫茶店なんです。それも、ロックな喫茶店。ライブハウスを兼ねているんですよ。でもって、陶芸の要素も加わえます。なんかまとまりがないように思えるかもしれませんが（笑）。実は数年前から趣味で陶芸を楽しんでいましてね。その喫茶店では、昼は自分が焼いた陶器で、自分が煎れたコーヒーをいろんな人に楽しんでもらいたいです。で、もし気に入ったお茶碗やカップやお皿があれば、買って帰ることもできます。コーヒーに関してもね、実は私、コーヒーコーディネーターという資格を持っているんです。だからコーヒーにはちょっとうるさいんですよ。

夜はそこでライブをやったりしたいですね。もちろん演奏するのはロックです。音楽が好きな仲間たちと楽しいひとときを過ごしていけたら、幸せですよね。

思い起こせば、私の人生ってなんだかんだ繋がっているように思えます。テニス好きの少年がある日から、洋楽にハマって英語に接するようになり、就活で落ち込んでいた時に『道は開ける』という本に出会って、教師になりたいと思うようになり、教師になるのなら英語でと思ったのは、それまでに関わってきた洋楽の影響が大きくて。で、教師になったら、これまでのどの学校でも、軽音楽部と関わることになって。英語と音楽はいつも自分のそばにいます。さっきも長々と話してしまいましたが、いつか教師を辞めた時、本当にロックな喫茶店を始めることが出来たのなら、その時は自分が学生だった頃の友人たちや、教師になって関わってきた生徒たちがフラッと寄ってくれるようなお店になればいいかなって思っています。みんなでレッドツェッペリンとか洋楽を歌って、みんなで人生を謳歌したいですね。

インタビュアー
大阪国際中学校高等学校　図書館司書
株式会社 紀伊國屋書店　角井 貴乃